

梓川上流，上高地徳沢 - 明神間の河道における年々の流路変動と環境多様性 Annual channel migration and environmental diversity in the upper reaches of the River Azusa, Central Japan

島津 弘^{1*}

SHIMAZU, Hiroshi^{1*}

¹ 立正大学

¹Rissho University

上高地自然史研究会は1994年以来上高地の徳沢 - 明神間の梓川河道において、ほぼ毎年7月下旬から10月までの間に地形学図を作成してきた。これらの地図の比較から、上高地における梓川河道の地形は数年に一度変化することがわかっている。上高地の梓川河道にはケショウヤナギをはじめとするヤナギ科の植物が単木あるいはパッチ状群落として生育している。この特徴ある植生の成立過程を明らかにするために、流路変動の様子を分析した。その結果、次のことが明らかになった。流路変動は流路が側方侵食を行いながら徐々に移動するのではなく、流路の埋積と新たな流路の掘削により流路の位置が移動し、河道内における流路パターンの変更が生じる。河道の中で流路パターンの変化があっても、5年程度以上にわたってほとんど地形の変化が生じない場所が存在する。このような場所では、ケショウヤナギの実生が幼樹へと生長し、パッチ状群落が形成される。大きな河道パターンの変更は前述の若いパッチ状群落を破壊する。しかし、すべてが破壊されることは希で、群落の一部は残存する。一方、部分的ではあるが側刻が生じる場合もある。このようなところではすでに生長した群落の大きさが縮小したり、独立樹が倒れる場合もある。群落内に砂礫が流れ込むこともあるが、すでにある程度生長した木本にはほとんど影響を与えず、草本のみが埋没し新たな林床植生が形成される。以上のように年々の流路変動という地形プロセスが河道内に存在する動的な環境の多様性をつくり出し、その結果、さまざまな樹齢のパッチ状群落と独立樹が河道内に点在する景観が形成される。

キーワード: 流路変動, 網状流路, 礫床河川, 環境多様性, 梓川, 上高地

Keywords: channel migration, braided channel, gravel bed river, environmental diversity, River Azusa, Kamikochi